



日本福音ルーテル教会 北海道特別教区報

第41期第2号

2021年9月10日

発行者:小泉基

「喜びと祈りと感謝に満ちた夏休み」

小泉 基

昨年が続いて、今年もパンデミック下の夏休み。休暇のお出かけを楽しむことも出来ない日々でしたが、今年はずっと素敵な夏休みの宿題をいただきました。教区の常議員会で、今年4月の春の集いでわかちあった愛唱聖句を集めた愛唱聖句集を作ることに決めたからです。

春の集いには対面とオンラインのハイブリッドで全道から40人もの方々がご参加くださり、短い時間ではありましたがそれぞれが大切にしてきたみ言葉と、そのみ言葉にまつわる出会いや思い出を語りあいました。オンラインの集まりに対応できず、参加が適わない方がおられた一方で、小さな画面の中ではあっても、長距離移動なく距離を飛び越えて集まれたということで、教区の集まりに初めてご参加くださった方も少なくありませんでした。

そして、わたしがこの夏休みに取り組んでいるのは、この時に集約された愛唱聖句カードと、その後にそれぞれの教会で集めてくださった愛唱聖句カードをひとつの冊子にまとめるという編集作業です。嬉しいことに、各教会からたくさんの聖句が集まってきましたから合計で109人分もの愛唱聖句を掲載することが出来そうです。みなさんが書き送って下さいましたみ言葉を、ひとつひとつ目を通しては冊子にまとめていきます。み言葉に添えられた想いは、短いひと言であっても、お一人おひとりがどのようにみ言葉と出会われたのか。そしてその小さな聖句を通して、いかに神さま・イエスさまと出会ってこられたのかという小さな証しでもあります。この編集作業は、109人分もの小さな証しに親しく触れさせていただいた、わたしにとってとても恵まれた夏休みの宿題となったのでした。ちなみに、109人の中で最も多く9人の方が愛唱聖句としてあげてくださったのは、テサロニケIの「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」(5:16-18)という聖句でした。いいみ言葉ですね。喜びと祈りと感謝に満ちた教区として、これからもともに歩んでまいりましょう。



礼拝堂紹介と近況報告

【函館教会の礼拝堂】

小泉 基

かつての仮会堂に代わる現在の礼拝堂は 1992 年に竣工しました。五稜郭公園に隣接し、繁華街にも近い市内の一等地、宣教最適地にあるのが強みです。実はこの会堂の建築計画は二転三転したため、当初の 2 階建て案が施工直前に 1 階建てに変更されました。そのため、建設にかかわった業者さんらの寄贈による正面のステンドグラスは、聖壇前まで来ないと図柄が見えないという不思議な設置となりました。礼拝堂正面の十字架は、函館どつくで勤務なさったドイツ人技師がプレゼントして下さったもの。仮会堂から引き継いで使っています。洗礼盤は、長らく洗礼鉢を使っていましたが、閉鎖される池田礼拝堂から 2019 年に譲り受けました。この教会で長く代議員を務められた増田憲二郎さんが池田教会開設の折に発注なさったものと判明しています。2020 年には松本教会の山崎種之さん(工房アスカ)からルターローズのステンドグラスが寄贈され、礼拝堂右側の窓に設置されました。もうひとつ函館教会の礼拝堂の特徴は、礼拝堂の屋根に大きく「GOD LOVE」と大書した屋根看板が設置してあること。年間 100 万人もの観光客が利用する五稜郭タワーの直下で、世界中の人たちにむけて「ここにルーテル教会あり」と宣教しています。



【近況報告】

全国的なパンデミック下にありながらも、6月以降もなんとか礼拝を継続することができたことがなによりの喜びであり、感謝なことでした。残念ながら8月に計画していた「有泉芳史さんチェロコンサート」と「長崎被爆交流証言を聴く会」は、ギリギリまで開催を模索したものの感染状況の悪化を受けて開催を断念せざるを得ませんでした。一昨年までは大勢の生徒さんたちをお迎えしていた遺愛生ウェルカム礼拝も、2年続けて開催中止となりました。来年の夏を楽しみに待ちたいと思います。それでも、今年は遺愛生の教会訪問が一部解禁されたこともあって、毎週生徒さん方がおいで下さり少しは賑やかな夏となりました。礼拝堂にビデオカメラを設置して中継で集会室から礼拝に参加できるようにしたり、14時から午後礼拝を開催して分散参加を推奨するなど、感染対策に気をつかいながらなんとか礼拝を続けています。

現在函館教会が抱えている課題は、建築から30年近く手入れがされてこなかった礼拝堂の屋根補修の問題です。数年ごとに繰り返される雨漏りと補修工事のイタチごっこに終止符を打つべく、数百万円を要する屋根の葺き替えを計画し、9月5日に臨時総会を行いました。どうぞお祈りにお覚え下さい。

【恵み野教会の礼拝堂】

佐藤 光子

赴任直後に礼拝堂を見た中島牧師は「美しいと思った」と第一印象で語っています。「光が差し、天に抜けていくように感じた」とも語っています。確かに聖壇に向かって左頭上高く天窓があり、陽の光が明るく差し込みます。今年の猛暑日には天窓を全開にして暑さを凌ぐこともできました。

築 35 年の礼拝堂にあるのは正面高く取り付けられた十字架を中心に、聖壇の聖卓等の典礼祭具と会衆席である木の長イス、年代物のリードオルガンと現代的なエレクトリックピアノと受付の台。これだけです。なのに礼拝堂が美しく、静けさの祈りの空間に包み込まれる安心感がどこから来るのでしょうか。シンプルな建物に深い思いと工夫が込められているからではないのでしょうか。

徳野昌博牧師（恵み野教会初代牧師）にお聞きしたところ、礼拝堂はノアの方舟を想定して建てられていて、聖壇の壁に縦長にはめ込んであるステンドグラスは舟が浮かんでいる水面、キラキラ輝く波がデザインされているとのこと。教えていただいて礼拝堂を注意してみると、高い天井は傾斜のある勾配天井で縦長の細い窓は天井近くまであります。聖壇の床の幅は左右アンバランスで片側は細くなっているようで船先のような感じです。えぞ松を使って建てられた礼拝堂にいますと本当に木造船の中にいるように思えてきます。正に神の限りない恵みを感じる礼拝堂です。



【近況報告】

中島 和喜

COVID-19 の影響を受け、5 月 16 日から計 7 回の礼拝を休止することとなりましたが、その間にオンライン礼拝を開始しました。さらに教会員同士の近況報告の分かち合いなどを行いつつ、礼拝休止期間であっても主のみ言葉を共に分かち合うことが出来ました。例年であればバザーの準備が始まる頃ですが、今年も昨年同様バザーは休止することとなりました。しかし、これまで地域に根差した活動だったこともあり、バザーの献品は少しずつ集まっていたので、教会員のみ限定し「教会内バザー」を数週に分けて行っています。外に出られない状況が長く続いているため、久々の買い物気分を楽しんでいます。

教会員のご家族で、兼ねてから施設に入所されていた方の体調が優れず、ご家族と相談した上で病床での洗礼式を執り行いました。そして洗礼式の二日後に天に召されました。主への告白はこの世での最後の出来事となりましたが、主に結ばれた中で天に召されたということが、寂しさの中でも主の平安に与る時となりました。どうぞ寂しさの中にある方を覚えて、お祈りください。

【札幌教会 札幌礼拝堂の紹介】

松島 直子

礼拝堂に座ると、年月を経た木がこんなに優しい色調で包みこんでくれるものなのかと、いつも私は思います。札幌礼拝堂は、1934年に献堂されたフィンランド様式の建築で、札幌市の景観重要建造物となっています。そんな札幌礼拝堂にはミステリアスな、自然が神様を賛美するとしか思えない瞬間があることを紹介します。礼拝堂の西側上方に円形のバラ窓があります。年に2回、春分の日と秋分の日夕方5時、西日がバラ窓から差し込む瞬間、その丸い光は東側聖壇の十字架をピッタリ照らすのです。つまり光の輪に十字架がはまるという現象。この幻想的な光景は、偶然そこにい合わせた人が体験できますが、“その瞬間に”雲がかかっていないことが条件、しかもその確率は低いのです。

87年前に緻密に計算して窓と十字架の位置を考えた、先人の粋な設計だといえます。決して毎年見られるわけではないドキドキ感も含めて。信仰生活においても、私達は光を求め、闇を照らす光に導かれて歩みたいと願っています。先人の信仰を育んできた息づかいと、神様からの光のギフトが秘められたこの礼拝堂は、やはり、私たちを優しく包みこんでくれる場所なのです。



【札幌教会 札幌北礼拝堂の紹介】

京谷 信代

私たちの教会は、地下鉄駅出口から1分、高速道路の出入り口から5分の立地にあります。そのうえ昨年末には教会の隣に六花亭が、今年春には向かいに保育園が建つなど地域の環境が変わりました。特に教会で会食等の交わりが持てない中であって、六花亭はコロナ禍にかかわらず営業を続けていて、礼拝帰りにお仲間でささやかな交わりを持つことも出来ました。周りの建物が変わり、宣教のチャンスを与えられていると感じます。私たちの教会は、礼拝が土曜日です。コロナ禍にありながらも、およそ20の方が出席しています。教会の自慢は、外靴でそのまま教会に入れる便利さです。平日の集会は、牧師が在宅の水曜日に集中的に行っています。「聖書の学び」、「オープンチャーチ」、そして札幌教会の集会として「平和を学ぶ会」です。教会の建物が各種集会をする規模として使い勝手が良いのか、コンサートや各団体の集会場としても有効に使われています。（現在は礼拝以外すべて休止）

復興支援のベルマーク収集活動をはじめ、プルタブ、古切手などの収集活動も長年続けています。牧師が常駐していないことで、信徒が自主的に教会活動を担っています。



【札幌教会 新札幌礼拝堂の紹介】

滝田 裕美

献堂から約 40 年・・・床は幾度となく工事をして、地盤沈下が原因で段差や傾斜が生じて足元注意。屋根は、大雨の時に雨漏りがひどかったので部分的な修理をしましたが、近い将来、大規模な修繕工事が必要です。

礼拝堂には、オルガンに加えてアップライトのピアノが置かれています。以前は集会室に置かれていたのですが、数年前のアドベントコンサートの際に伴奏で使われて以来、置きっぱなしになっています。その後、オルガンが不調で音が出なくなった時に、一回だけ活躍しました。

礼拝堂の正面に向かって左側に、久しく使われていない「洗礼盤」があります。真上からスポットライトを浴びて輝きながら、受洗者を待ち望んでいるように見えます。

札幌教会のオンライン礼拝は、新札幌礼拝堂から中継しています。コロナ禍で礼拝が中止された時から始め、クオリティを上げるため未だ試行錯誤の日々・・・課題は映像の明るさです。礼拝堂の正面から自然の光が差し込んでくる構造になっているため、聖壇にカメラを向けると逆光になってしまう・・・説教する牧師の顔が暗く映ってしまうのを解決するため、毎週カメラの位置を変えながら実験しています。



【近況報告】

日笠山 吉之

新型コロナウイルスの感染再拡大のため、5月の半ばから2ヶ月間にわたって公開の礼拝の中止を余儀なくされました。会堂に集まる主日礼拝が9回できなかったわけですが、これは既に去年と同じ回数です。相変わらずコロナの終息の見通しは立っていませんが、これ以上礼拝を中止しないで済むよう祈るばかりです。

礼拝中止期間中も、オンラインによる礼拝配信は毎週続けられました。いつもは10名そこそこの参加者数ですが、礼拝中止期間中は30名以上の方々がリアルタイムで礼拝に参加されました。一同に会することは出来なくても、オンラインを通じて共に礼拝に与ることのできる恵みを感じることが出来るからでしょう。またその間、教会員の方々には郵送やメールで週報と説教原稿を届け続けました。喜んでいただき牧師冥利に尽きます。

会堂に集まる礼拝は7月の第3週から再開されましたが、その途端に気温も上昇。札幌は連日記録的な真夏日が続きました。それでも再開された礼拝に来られる方々の表情は明るく、喜びに満ちています。「見よ、兄弟が共に座っている。なんとという恵み、なんとという喜び。」(詩編 133 編 1 節)という今年の教会の主題聖句を噛み締める今日この頃です。

【帯広教会の礼拝堂紹介】

岡田 薫

帯広教会の礼拝堂は、1978年11月5日に献堂式を行いました。外壁は煉瓦タイル、内部は全体的にカーペット敷きという洋風デザインは初代牧師であるロイド・ネービー宣教師のアイディアと伝え聞いています。夏は外気温よりもおおよそ5℃は低く快適に過ごせる礼拝堂です。

何ととっても、この礼拝堂の特徴は、ルドルフ・カイテン宣教師（日本基督教団十二使徒教会創設者、オランダ系アメリカ人。1960-1994年までの34年間道内で宣教活動を行った。アメリカの円空と言われていたそうです。）作成の十字架と説教台です。カイテン師は砂澤ビッキさんと知り合い木彫りに目覚められたそうで、東京三鷹にあるルーテル学院大学・日本ルーテル神学校チャペルにも十字架とレリーフがあります。

ふたりの宣教師の出会いがどのようなものであったのか定かではありませんが、同労者として情報交換や励まし合いながら宣教に励まれていたのではないかと想像します。すでに両者とも天に召されていますが、異国の地で福音の種を蒔かれた人々の思いを後世の私たちは見える形、見えない形で受け継いでいることを嬉しく思います。



【近況報告】

寒暖差の激しい十勝地方。今年の夏は例年よりも雨が多かったように思います。7月初旬は朝夕ストーブのお世話になることもしばしば……。ところが一転、夏日の到来から2週間ほどは猛暑日、酷暑日と先日までの涼しさを取り戻したくなるほどの暑い毎日でした。それでも玄関前の小さな庭では、草花たちが自分の時を見極めつつ成長し、花を咲かせ道行く人を和ませてくれています。農作物の生育にはどれほどの影響が出ているのかわかりませんが、十勝の豆の出来が良いのか悪いのかがとても気になります。

Covid-19の感染拡大は十勝地方でも高止まり傾向が続いています。礼拝再開後は、個人の判断で不安や不調を感じたら躊躇なくお休みいただくようにお声がけしつつも、主日礼拝、夕礼拝（月に二度）、浦幌集会、家庭集会などが行われています。いずれも少人数ということもありますし、ワクチン接種もだんだんと進められています。「礼拝までまたお休みなったら、もうどこにも出かけられない」という声もあるので、教会でも万全の対策をしつつ継続したいと思っています。長引く巣ごもり生活において、皆さんの予防対策はしっかり身につけているので安心しています。



『信仰の灯は永遠に』を読んで

恵み野教会 石垣幸子

コロナ禍の中で教会より頂いた池田教会の記念誌をひらき、まず一番先きになぜ？と驚きました。それは浦幌の町立博物館に町のバックアップのもとで小さな教会の歴史資料、礼拝堂（復元）など、博物館の中に池田教会のコーナーがあるということです。えーこんな事があるんだ！！と思いつつ読ませていただきましたが、読み進めている内に納得できました。そこには初代牧師吉田先生の働きは、牧師としてだけでなく、浦幌の開拓所理事として浦幌開拓に貢献したこととあります。

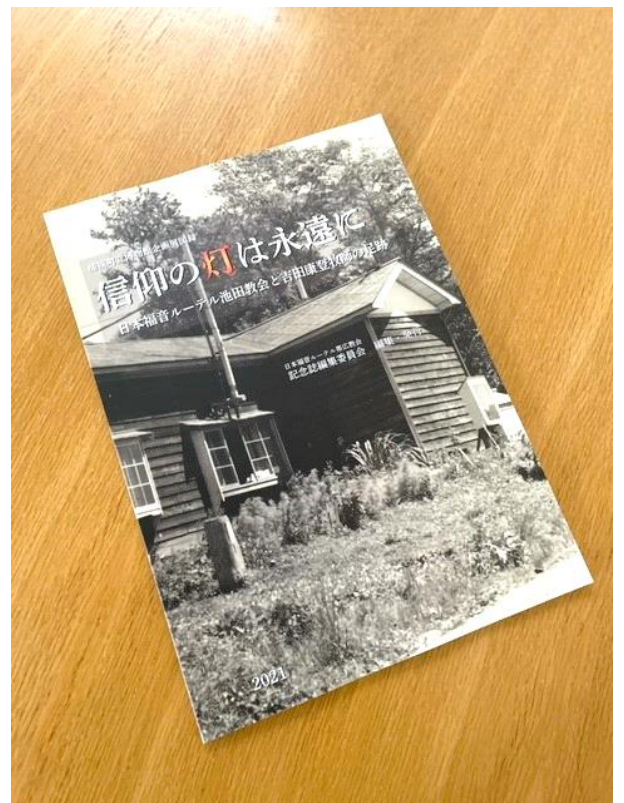
学芸員の持田さんによると（P.4）池田教会は信徒のみでなく、地域の人々の熱意によって建てられ、精神的支柱となってきたとあり、教会の姿とキリスト教が地域に果たしてきた役割を記録して行くことが、今求められている。そして後世に残していきたい・・・とありました。

池田教会のはじまりは記念誌の表紙の写真にあるように、炭鉱が閉山し、残った建物を伝道所としたとあります。（S29年）そして8年のあいだに伝道所は40名の人が集う教会として発展し、伝道所は教会へと変わり、新会堂、池田教会がたてられたとあります。その間14年という短いあいだに教会は大きく成長したようです。こんな話しが記念誌にのっていました。（P.22）

浦幌で郵便配達をしていた徳永さんは、この地域ではめずらしく、吉田先生に九州や海外から郵便物が届き、どんな方かと気になっていた。ひよんな事から先生との交流がはじまり、キリスト教の話しに感銘を受け、徳永さんが町の青年団に持ちかけ、家庭集會がはじまり、聖研と輪を広げ、20数名となり、受洗者を産みだしたとあります。福音の広がり早さにびっくりです。又、信徒さんの思い出ばなしとして、家庭集會、聖研、礼拝終了後、必ず食物が振る舞われ、その事が教会の楽しい思い出とつながっていると書かれています。

恵み野教会もクリスマスなどのごちそう、祈り会のあとのまぜごはん、つけ物など、一緒に食べることは大切な時なのですね。

ひとつの教会が主の働きによって生まれ、成長し用いられ、歩み進み、そして働きの終わりが来て、でも、それで終わりではなく、帯広の教会へと移行し、福音の働きは続いて行く。このすばらしい主の業の足跡を読ませて頂き、深く感動いたしました。



オンライン教区合同聖書研究会に参加して

有働あけみ(帯広教会)

“全道から集おう、み言葉にあずかろう”春夏秋冬4学期制、朝クラスと夜クラスがあります、という案内を見て、覚えてたのメールでPCから申し込みました。案内の隅には“夜クラスは申し込みが3名以下なら開講されません”とあり少々不安でしたが、第1回目から20名の参加ですごく良かったと思うと同時に、私も含め皆さんがこの機会を待っていたと思いました。

オンラインの環境が整っていれば、全道全世界が繋がることも実感しました。家に居ながら顔を合わせて共に聖書に書かれている、時代背景や言葉の意味を学びわかりやすく教えて頂きました。参加者一人一人の感想や思いを伝え合う時は、聞いていて「そんな考えや感じ方があるんだなあ」と、毎回感心しています。私は自分の感想を伝えるのが少々苦手ではありますが、参加して感じたことを言葉にすることは大事なことだと思いました。自分の思いも正されます。

後半の秋学期、冬学期もどんな聖書研究なのかが楽しみです。帯広教会は札幌、恵庭、函館からポツンと離れていますが、オンラインで繋がり、キリストの体なる教会＝ぶどうの木に繋がっていることを改めて感じ後期も参加したいと思います。

オンライン教区合同聖研を開催中！

夜の部：毎週水曜日 19:30~20:30

朝の部：毎週木曜日 10:30~11:30

秋学期は「歴史から見る宗教改革」と題して中島牧師が担当しています。ぜひご参加ください。

越野智恵子(札幌北礼拝堂)

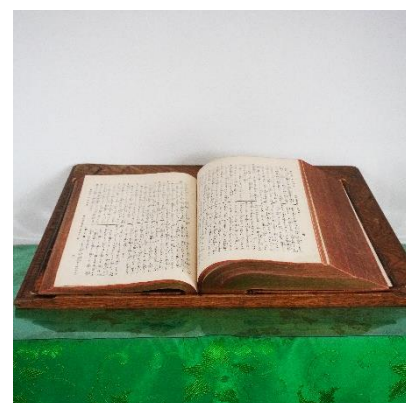
いつまでも続くコロナ禍、飛行機が格安で世界中どこへでも飛ぶことのできる現在、まさか母国へ帰ることがこんなに困難になるとは思いもよりませんでした。何となく心が晴れない日々を送っていた私に、この3月友人から朗報が飛び込んできました。そう、「オンライン聖研」のお知らせです。

いつもは近くの教会に通い、教会員とも良い交わりを持っていますが、私にとって何年たっても「祈り」は日本語で、また説教も意味は理解できても心の奥底にストーンと落ちないもどかしさを感じていました。そんな中でのオンライン聖研なのです。

少し緊張して第一回目の聖研が始まりました。画面に写る牧師と二十数名の参加者。皆様の顔を見ているだけで嬉しく、涙が出そうになりました。そして毎回牧師の言葉が渴いた体に沁み込むようで、私自身どんなに待ち焦がれていた聖研なのだろう、と実感しました。又、参加者一人一人の感想を聞き、新しい発見があったり親近感が湧いたりしています。5月には日本の夜空、皆既日食も見ました。回を重ねるごとに、すっかり仲間になったような気がしています。

主にある交わりが母国語で出来ることは本当に素晴らしいことです。いつかこの仲間達と直接会いたい…と願っています。

コロナ禍での教区の新しい試み、「主に感謝！」です。



教勢動向(6月1日～8月31日 一部期間外を含む)

函館教会

・召天 大川伸江(5月23日)

恵み野教会

・受洗 藤井俊久(8月4日)

・召天 藤井俊久(8月6日)